オンライン／東京古田会 10 月研究会

空白の時代
卑弥呼の時代のヤマト王権

作成　竹田侑子

はじめに

２０１０年７月、えど博カルチャー「いまなぜ邪馬台国か」というシンポジウムが開催されました。２００９年の奈良纒向遺跡の発掘調査で大型の掘建柱建物跡が発見され、注目を集めていた時期でした。

案内パンフレットに下記のような文言がありました。

「邪馬台国の時代」すなわち「卑弥呼の時代」は、わが国における国家形成期に相当するきわめて重要な時期であり、所在地の問題に限らず重要な課題が数多くあります。また、この時代を理解する上では、その前史である弥生時代がどのような社会であったか、検討することが欠かせません。

①

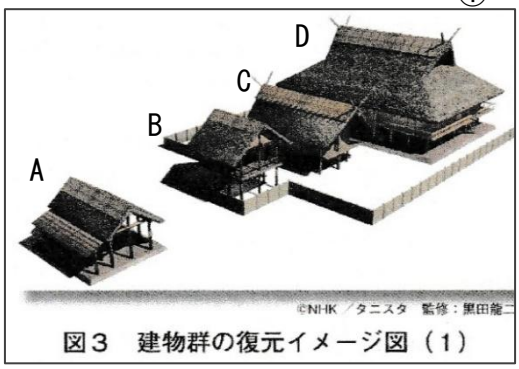


図３　建物群の復元イメージ図（１）

（纒向考古学通信　VoL.2 より）

えど博カルチャー前年の１１月、纒向遺跡 166 次調査の報告会があり、発掘された建物群は整然とした企画に基づいて構成された三世紀前半から中頃までの建物遺構であることが発表されました。上図①は、調査に基づく復元イメージですが整地上の造成及び建物Ｃ・Ｄの構築は三世紀前半の荘内式古層段階に行われたと考えられていますす。

建物群の廃絶については、建物の柱穴を切って掘削された溝遺構（第 162 次調査）や第 166 次調査の切り合い関係から三世紀中頃（庄内式期）を含めてそれ以前と考えられ、これまで一連の調査対象となった微高地が、三世紀前半代に纒向遺跡の中心的な人物がいた居館であったと考えてほぼ間違いないと思います、と報告されました。

さらに、２０１０年には大型建物跡の南側にある「土坑」から、約２８００個の桃の種が出土しました。国内の二研究機関で放射性炭素測定が行われ、西暦 135～230 年のデータが得られました。桃は祭祀に用いられたとみられています。

纒向学研究センターでは、これまでの研究結果とも符合し、重要な研究結果だとしています。

纒向遺跡調査のこの段階では、『魏志倭人伝』の卑弥呼の時代（弥生後期後半 200～250 年）とほぼ合致し、建物群は卑弥呼の居館かと報道され、大きな期待が寄せられました。

しかしながらその後の発掘調査結果は、期待とは逆の方向へと動いたようです。

ヤマトは女王の邪馬台（壹）国とは別性格の国

三、四年前あたりからでしょうか。新聞やテレビを賑わしていた纒向遺跡関係の報道がピタリと止みました。橿原考古学研究所所員として石野博氏とともに四十年も発掘調査に携わってきた関川尚功（ひさよし）氏の『畿内ではありえぬ邪馬台国』という衝撃の報告書が出たのです。

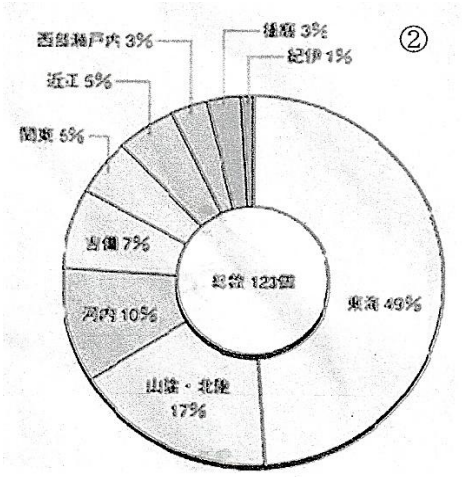
（『纒向』2022 年 9 月刊）

関川氏は指摘します。

２００９年発掘の中心的建物とされる大型建物Ｄは主柱の半数が失われている。それはその後に築かれた特に古墳時代前期の大きな区画溝による掘削のためである。遺構の中心になるような重要な建物であれば、構築からあまり時間を置かずに幾つもの遺構によって簡単に壊されるようなことはないであろう。ここが纒向遺跡の中枢ともいえるような特別の地点であったのかはあきらかではない、と。

また、箸墓古墳を含む纒向遺跡は古墳時代初期から前期のころに中心があり、卑弥呼の時代の後にくる時代のものでした。

関川氏はまた、纒向遺跡から少し南に離れた弥生後期の遺物が出土する地区（芝遺跡か）について、搬出土器（ヤマト以外から入ってきた土器）の分析を行い、右記のような分析結果に基づき、近畿ヤマトの国の特質を論じています。



搬出土器の分析結果は、東海系４９パーセントをはめ、山陰、北陸、河内、吉備、関東、近江、西瀬戸内、播磨紀伊と日本列島の広範囲に及ぶ交流が見られる中で、朝鮮半島は１例だけであり、また九州関係も１例のみである。

ヤマトには朝鮮半島の楽浪郡や帯方郡を介して中国魏朝へ貢献した女王卑弥呼の邪馬台（壹）国であることを証明きるような出土物ない。銅鐸はあっても卑弥呼を象徴する鏡はみられない。土器についても朝鮮関係の１点を除いて、中国は勿論、九州のものもほとんどない。ヤマトの住人は皆、東に座する三輪山を拝し、交流は西の九州や中国・朝鮮半島ではなく、北陸や関東までも及んでいる。ヤマトには、「親魏倭王」である邪馬台（壹）国とは別性格の国があったと考えられる、とします。

さらに加えて、別性格の国の条件がもう一つ。近畿ヤマトには、女王国にはいないはずの馬がいたのです。

国内最古の馬具出土

１．新聞の報道

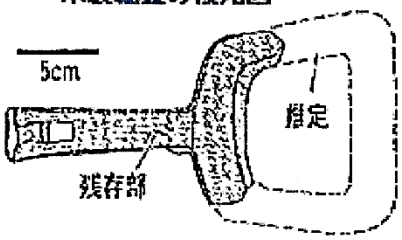
2001年12月1日(土)の『西日本新聞』につぎのような記事がのっている。他の朝刊各紙にも、ほぼ同じ内容の記事がのっているが、『西日本新聞』の記事が、コンパクトである。

国内最古の馬具出土

四世紀初めの木製輪鐙　乗馬　定説の50年前から？

奈良県桜井市箸中の箸墓古墳の周濠から、乗馬の際に足を掛ける馬具、木製の輪鐙(わあぶみ)が見つかり、桜井市教委は三十日、「輪鐙は四世紀初めに周濠に投棄されたと推定され、国内最古の馬具である可能性が高い」と発表した。

木製輪鐙の復元図



国内での乗馬の風習は、副葬品の馬具や日本書紀の記述から、四世紀後半以降、朝鮮半島の百済などとの交渉を通じて伝えられたとする見方が有力。実用品である鐙が見つかったことで、定説を五十年以上さかのぼり、乗用馬が四世紀初めに存在した可能性が高くなった。初期ヤマト政権の交通事情や対外交流をさぐる上で重要な資料になりそうだ。

箸墓古墳は卑弥呼の墓とする説もあり、市教委が3年前に後円部の周濠跡を調査した際、埋土の中から輪鐙が出土。アカガシ型で残存長 16.3 センチ、最大幅 10.2 センチ。鞍からつり下げるためのほぞ穴(縦1．5センチ、横1センチ)が付いていた。足を掛ける輪の下側が失われているが、復元すると長さ23センチ、幅13センチの台形のつり革に似た形とみられる。

輪鐙は落葉などが20～30年にわたってたい積して固く締まった層から、四世紀初めの大量の土器とともに出土。同時期に投棄されたとみられ、後世に混入した可能性は低いという。鐙は、乗馬が得意でなかった農耕民の漢民族が三世紀ごろ、馬にまたがる際の足がかりとして発明したとされる。現存する最も古いものは、天安斗井洞(朝鮮半島・百済時代初期)の木芯鉄板張輪鐙とされている。箸墓の鐙もこれに並ぶ現存最古級とみられる。

(注1):「四世紀初めの大量の土器」は、「布留1式」の土器。(桜井市教育委員会)
「「布留1式」の土器の初現は、西暦 300 年ころから」とする研究者が多いが、「四世紀の真ん中前後」(350 年前後)と考える研究者もいる。　(ウィキペディア「箸墓古墳の築城年代」邪馬台国の会より抜粋)

日本の馬に関しては、縄文時代や弥生時代からの遺跡から馬骨や歯の化石が出土したことから、馬の渡来はこの頃からと推測されていましたが、C14 年代測定法などの研究結果から、サンプルとした出水貝塚（縄文後期：鹿児島県）の馬骨資料は、縄文の貝塚が形成された後に、中世以降の馬骨が貝塚へ混入したものであることが明らかになり、縄文馬の存在については、実証的検討をして再考する必要が示されました。　（日本文化財科会誌「考古学と自然科学」２６号 1992 年）

以来、日本の在来馬は、『日本書紀』応神 15 年の〈百済の王、阿直岐（あちき）を遣わして、良馬二匹を貢〉をもって、四、五世紀の古墳時代に朝鮮半島から渡来して各地に広まったと考えるのが妥当とされて、定説となっています。

ですから、四世紀中頃までに投棄されたとされる輪鐙の発見は、文献史学のみならず考古学的見地からも是とする『書記』の「応神１５年の条を以て日本の馬の初登場」とする定説を否定することになるのです。

現在の日本史学は、故津田左右吉教授の「応神以前はウソが多い」を基礎にして構築されてきましたが、その後の研究から「崇神あたりからは全てがウソとはいえない」とする見解が主流となったようです。

そこで、「記・紀」の崇神、垂仁天皇項を調べてみました。『古事記』崇神天皇項には大彦が北陸へ派遣された時に山代の境界の坂に立って「御真木入彦（みまきいりびこ）はや」と歌う少女に不思議を感じて、馬を返して少女に問いかける場面があります。大彦は騎乗していたのです。（『日本書記』には記述なし）　また、『書記』の垂仁天皇３２年条には「人や馬および種々の物の形を造って…」と殉死を禁じ、墳墓に埴輪を立てて代行させたという記述があります。

この二つの記事から「崇神・垂仁天皇のころの人々は馬を見知っていた」と推定できますが、また「輪鐙」が廃棄された時代でもありますから、垂仁天皇の頃には、「軍馬」としての馬はすでに姿を消し、騎乗する武人も飼育する人たちもいなくなっていた、と考えてもよさそうです。

では、

① 崇神に始まる初期ヤマト王権の前に存在し
② 住人は皆、東に座する三輪山を拝し
③ 交流は東海地方や関東、北陸、山陰、吉備、西瀬戸内、播磨、紀伊と日本列島の広範囲に及び、中心的存在でありながらも
④ 中国や朝鮮半島との交流はなく
⑤ 加えて、軍馬がいる国

という卑弥呼の邪馬台（壹）国とは別なる性格の国としての条件を満たす国が現実として存在していたのか？という疑問出てきます。

上記の問いにたいして、筆者は「実在していました。その条件を全て満たす国がありました」と応えたいと思います。

実は、弥生・古墳期の国の形を可視化するために実証できそうな記事はないかと「和田家文書」を探している中で、「神武天皇即位は前漢恵帝の三年（前 193 年）と『天皇記・国記』に記

述あり」とする記事を見つけました。この年号を使って、秋田孝季たちが調べ、計算し、中国年号に換算して記述した事柄を計算し直してみると、驚くほど考古学年代や中国史書年代に合致してきます。

伝承や伝説には史実が投影されている

故津田左右吉教授によって「応神天皇以前はうそが多い」と否定された後も少数意見者として、「伝承や伝説には史実が投影されている。何かその原型となるもの、核というべきものがある」とした方々もいます。

ではその「原形となるもの、核というべきものとは何か」と考えて、「記・紀」の底本である天武天皇撰録の「帝紀」に行きつきました。

歴代天皇の皇位継承の次第を記す「帝王の日嗣」については、天武天皇や太安万侶によって出自や在位年数等々に意図的な修正や創作があったとしても、歴代の天皇名等、大筋のところにおいては真があるのではないか、と考えたからです。

「和田家文書」には、聖徳太子と曽我馬子によって編纂されたと伝わる「天皇記・国記」が、数奇な運命をたどって石塔山に秘蔵されるまでの過程やそれを読んだと思われる人たちの記述が散見して記載されています。その中で、「これは読んでいるな」と思った人たちの記事を『和田家資料２「丑寅日本記」』（北方新社）から抜粋して紹介します

①丑寅日本記第八　安倍抄記之序

第二章に曰く

倭史（※倭は近畿ヤマト）なる天皇即位に当てつる年代をして東征及び天皇一世の成れるは支那年号よりなる恵帝己酉三（前 193）年なりと天皇記に遺れり。国記にても倭国の建国はその同日なり。亦、即位の儀なるは泉原なる処と記ありぬ。即ち、摂津の国内なる龍王山、鉢伏山の関と曰う。依て、橿原の地に非ざるなりと曰ふ。此の地は耶靡堆の阿毎氏の域にて進駐の叶はざる処なりと記に遺りぬ。　―後略

明徳庚戌（1360）二月十一日　　物部鑛金

②丑寅日本記第十　天皇記行抄一

倭史なる古事記、日本書紀の筆頭行記に載るる天皇の累代は天皇記に記行なかりけり。神代亦、然りなりき。

抑々天皇記に創まれる起行の筆頭にありては、耶靡堆国、筑紫国、琉球国、南海道国、淡志国、那古国、越国、出雲国、高嶋国、日本国、日高国、流鬼国、千嶋国、佐土国、對馬国、伊治島国、隠岐国、壹木国、坂東国、高砂国の二十国なり。

此の国々島国を治むる国王の基に二百七十八王の族長ありて各々に睦りぬ。―略

世、移りにして国主族主併合し、坂東より丑寅を日本国とし、赤間に至るを耶靡堆国とせり。亦、筑紫を耶馬壹国とて三王国にて併せしも、耶摩堆は木国、那古国、越国、出雲国、浪速国、高島国、南海道とて分岐し、筑紫にては、奴国、熊襲国、日向国、薩陽国、隼人国に相分岐して、常に攻防を繰り返せり。丑寅にありき日本国耳治安し、民の世々能く富めり。

正平六（1351）年十月二日　（原漢書　天皇記）

三河住　橘秀継

③丑寅日本記第八　丑寅日本国要記

倭史の作説なるを審し得るは、天皇記、国記に依るこそ倭史の実相なるも、是を古事記、日本書紀等にくらぶれば雲泥の相違なり。天皇紀元ぞ前漢恵帝の己酉年とあるも、即位の定かならずとありき。　―以下略

建長壬子（1252）年三月一日　（原漢書）

竹内金明

④丑寅日本記第十　天皇紀行抄二

凡そ倭国に天皇創めて即位せしは古事記・日本書紀に記行せるより史実相違せるは明白なり。

天皇とは、支那天皇氏を風聞にして号したるは、百済聖明王が仏法を伝えしより、添書に日本天皇とて当たるに創りぬ。―略

天皇記を記しけるは耶靡堆阿毎氏、阿輩氏、和珥氏、春日氏、磯城氏、明日香氏、大神氏、生奈氏、日向氏、越王氏、出雲氏、奈古氏等出自に倭国王は成りて、万世一系に非ざるなり。

―後略

正平六（1351）年十月二日　（原漢書抜天皇記）

三河住人　橘秀継

⑤丑寅日本記第七　天皇記国記之抄

一前略

即ち天皇記とは曽我氏に公蔵されし天皇秘書なり。国記また然りなり。

然るに由ありて平将門の手に入りて豊田神皇社にありきを藤原秀郷、秋田生保内に忍従せし将門の遺姫に届けしものと曰ふ。大巻の書なり。

文正丙戌（1466）年二月七日　竹内宗達

追而

天皇記は東日流の石塔山に平楓姫が奉寄せりと曰ふ。余、是を写したるものなり。

右追而如件　宗達

「天皇記・国記」の既読者であろうと推察される人物たちの記事には、「天皇記には、記紀の筆頭行記に載る天皇の累代は記行になく、神代もまたない。天皇とは百済聖明王が仏法を伝えたときの添書に、日本天皇と記されていたことに創まる。その以前の倭（近畿ヤマト）王朝は、諸氏族長の諸権の力量によって判断され選出された混成王朝であり、万世一系にあらざるなり」と記されています。では、神武の東征にはじまる「記紀」の崇神以前は全て作り話か、というと、そうではないようです。

「丑寅日本記七巻の石塔山古書目録」には、秘巻天皇記十二巻、国記十二巻の他に阿毎王記、巨勢王記、大根子王記、春日王記、安日・長髄彦王記等々、二十五点の蔵書名が記されています。その中に佐怒王記があります。

「佐怒」は「神武」と諡号される前の九州時代の名前ですが、九州から東征して近畿ヤマトを征服し、即位したか否かは不明ですが、王権の礎を築いた実在性の高い人物としてもよいように思います。

今回は、②の「天皇記」記述に、

…世、移りにして、国主・族主併合し、坂東より丑寅を日本国とし、赤間に至るを耶靡堆国とせり。亦、筑紫を耶馬壹国とて、三王国にて併せしも一

と、空白の時代と思っていた弥生から古墳期にかけての日本列島は、三王国時代と認識されている時代であったと記述されていることを報告したいと思います。

空白の時代／三国時代の日本国

「天皇記」に記される三国時代の坂東より丑寅の日本国とは、神武に敗れて北落した安日・長髄彦と同行の耶摩堆（ヤマタイまたはヤマト）一族とが、東日流外ヶ浜から内陸に入って先住の阿蘇辺津保化、中国は晋（春秋時代）からの流民一族を討ち、四族併合して建国した国であります。

日本（ひのもと）を国号とし、稲作と交易をもって生業とした国は周辺諸国へ広がり、弥生後期初頭には南分倉（東西南北に配した五王政所の一つ）が武蔵（埼玉県大宮辺り）に設置されました。

以降、気候変動（寒冷化）をうけて、日本国の中心文化圏は、東北南部（宮城県宮沢：現大崎

市）を含んで、南は富士見える安部川流域（静岡）と西は越の糸魚川（新潟県）を結ぶ横断線（糸魚川・静岡構造線）を近畿ヤマト政権との境として、関東地方へと移って行き、日高見国と呼ばれるようになりました。

下記「年表」は、神武に敗れて北落した外ヶ浜東日流（つがる）の地で、先住の三族と北落してきたヤマト族の四族を併合し、日之本国を創建した安日彦長髄彦の子孫が、故地奪回を果たすまでの時間帯と事項を年表にしたものです。

四たび、四百年を要した故地奪回のストーリーは大変長いので、故地奪回を目指した記事を中心に、抜粋して紹介します。

〔 年表 〕

歴代天皇（日本書紀による） ※空位計算は玉川宏氏	西暦年号：神武即位年を前 660 年とする／日本書紀・東日流六郡誌大要 （ ）内年号：神武即位年を前 193 年とする／天皇記・国記・鮮卑書・語部録
初代 神武天皇（前660~585年） 在位76年　崩御127歳	紀元前 661(194)年頃：安日・長髄彦、神武に敗れ、東日流外ヶ浜に落着
空位3年：手研耳（てぎしみみ）の反逆	652(185)年：安日・長髄彦、先住四族を併合し日之本国を建国。初代大王安日彦、副王長髄彦とし、東西南北に分倉王を配す
2代 綏靖天皇（前581～549年） 在位33年　崩御84歳	610(143)年：2 代安比彦王立君。586(119)年：安比彦と長髄彦の次王ら、故地奪回のため関東の一族とともに遠征し那古に進駐。倭王老齢尽くし恐れに崩じ、臣下ことごとく遁逃。綏靖天皇は傀儡政権
3代 安寧天皇（前549年~511年） 在位38年　崩御57年	564(97)年：3 代安舎羅彦王立君
4代 懿徳天皇（前 510 年~477年） 在位34年　崩御77歳	520(53)年：4 代奥法女王立君
5代 孝昭天皇（前 475 年~398年） 在位82年　崩御114歳 空位：53年(在位 30 年)	448(AD19)年：5 代荷薩丁王立君。大王政所を荷薩丁に移す。東日流は荒覇吐神聖地として祭祀所となる 416(AD51)年：政所を宮沢に移し南分倉を坂東武蔵に移す
6代 孝安天皇（前 392 年~290年） 在位102年　崩御137歳 空位：83年(在位 19 年)	415(AD51)年：6 代多羅彦立君するも同年崩じ、7 代讃日彦立君。大船を越州湊に造り、支那安王に交わるという。讃日彦王、韓に馬を得て、支那馬術チャバンドウを練る。初の騎軍創設。故地奪回の兵を挙げ、空位に追い込む（孝昭天皇か）
7代 孝霊天皇（前 290 年~214 年） 在位 76年　崩御129歳 空位：39 年(在位 37 年)	373(AD94)年：讃日彦王崩じ、珍日彦王 8 代大王に即位
8代 孝元天皇（前214年~158 年） 在位 57年　崩御 116歳	288(AD179)年：9 代清糠彦王立君。283(AD184)年：騎軍を以て倭の那古に至り、170 国の国主を誅し信州日下部に本陣を囲むも陣中に急死
9代 開化天皇（前158年~97年） 在位　61年　崩御　111歳 在位17年(空位9)	274(AD193)年：10 代武波日彦王立君。天変地異からの復興に 30 年を要す。 244(AD223)年：故地耶馬台国を攻めて奪還。子の根子彦を立君させる。孝元天皇なり。奥州の長老是を忌み、坂東に長子興日彦を立て正王とする
10代 崇神天皇（前 97 年~30 年） 在位　67年　崩御　120 歳 空位：34 年(在位 26 年)	233(AD234)年：武波日彦、荒覇吐族を退き、出雲、筑紫、南海道、山陰、山陽の国主を併せて日本天皇とて統治する。 214(AD253)年：天皇空位となり諸国乱れるも、根子彦（開化）荒覇吐系より立君日本を捨て国号を倭とし、国の一統なる。前 141 年、倭朝また空位。 97(AD370)年：倭朝再起せり（崇神）。天下に悪疫流行。

故地奪回！孝元天皇は我らが王

1. 荒覇吐王二代の西征／総輯『東日流六郡誌全』より

―前略

九代済糠彦王、日高見来朝の高倉に長老を集め、故地耶馬台国の奪回を欲して、衆議心意を求む。　一略

故地にては、高砂日向東侵の一族、倭と称する王朝を建て一国をなしおりしも、王権をめぐりて内攻絶ゆるなく、一統の司あらざるなり。さりながら、国主はいづれも高砂日向族。あるいはその連枝なれば、荒覇吐軍の進攻にいたく驚き、諸地に於いて、抵抗をこれり。

荒覇吐軍、数年をかけてこれらを打ち破り、倭領なる那古に至り、さらに信州伊那に五陣を置き、また日下辺に本陣を定めて故地耶馬台国への攻勢を固めたり。しかるに、済糠彦王、倭国進攻を目前にして、忽然と薨去、陣没せり。ために、荒覇吐軍は、いったん本国に引揚げのやむなきに至れり。

糠彦王のあとには、武波日彦王が立君せり。即ち、大根子彦なり。はじめ領国の完治に意を尽し、再び討西の軍を起せるは、先王が陣没よりおよそ三十年を経しときなり。

大根子彦王、陸路六万、海路一万の征討軍を率いて、倭国へ進発せり。

　一中略

大根子彦王、故地を見渡せるに、**三輪山の故神の跡、はなはだ慌芒たればこれを天社とて復興なし、さらに、胆駒山に地社を、木の国の熊野山に水神を祀れり。**

ここに於いて、大根子彦王は、次男なる根子彦を荒覇吐五王の一王なる西分倉王とて**三輪山にて立君せしめ**、即位の挙式をなしける。集いたる**西領の国主百八十に至り**、根子彦を孝元王とて仰ぎて、忠誠を誓いたれば、ここに**五畿七道の治領、耶馬台の旧に復せり。**

さりながら、荒覇吐王国の高倉は、依然、日高見来朝にあり。大王たるは武波日彦、またの名を大根子彦にて、ひきつづき、四王及び諸国主を統治せり。根子彦王たる孝元王を孝元天皇と称せしは、後世倭史による作説にて、荒覇吐分倉王にすぎざるなり。一後略

寛政五年十月　秋田孝季

②第五章　故地奪回し立君のこと／「東日流六郡誌」総結之抄書より

世代を経るほどに、荒覇吐王国は南に移りき。東奥を一統せるや、坂東、越州に国の境をなし、不二なる火の山を荒覇吐神とて鎮めたるは根子彦王なり。

根子彦王、みずから子息なる稚根子彦を従えて、倭国、即ち、故国たる邪馬台国を攻め抜き、ここに人皇孝元天皇とて即位せり。また、稚根子彦は、そのあとを継ぎて、三輪山に荒覇吐神を鎮め、即位しけるというなり。これ、倭史の称ふる開化天皇なり。

以上述ぶるは、東日流の語板木なりて、二千年を超ゆる古事なりきといふ。

さて、七代讃日彦王が創設した騎馬軍は九代済糠彦王の時には五万騎に達し（「六郡誌大要一の巻」）、その勢いをもって故地奪回をめざした糠彦王が故地ヤマトを目前にして、信州日下部の本陣で忽然と死したという前 289 年ころから、十代荒覇吐大王となった武波日彦が天変地異からの復興に三十年を要したとする前 274 年の間の別項記事（「六郡誌大要東日流六郡誌考察図天之巻」）に、「東国に不二山噴火なし、西国に国裂け、大津なる大湖とて水溜りぬ。東西とも飢え…倭国大乱の因となった」とする記述があります。

そこでこの天変地異なる事件は本当だろうか、とネット検索をしたところ、「孝徳天皇四年、淡海の国では地が裂けて湖水となり、駿河国では富士山が一夜のうちに出現した」という地形変動伝説があることを知りました。

前 283～274 年は、「日本書紀」では孝霊天皇の初期。天皇記年号に換算すると紀元 184～

193 です。倭国大乱は、後漢書：147～189 年、梁書：178～184 年です。倭国大乱後に擁立された女王卑弥呼と大王急死によって即位した十代武波日彦は、同時代の人物と考えられます。

騎軍を率いた武波日彦の故地奪回は、無血の勝利であったと記されています。孝元天皇としての即位に関しては、

1. 次男の根子彦を即位させた
2. 自らが即位した
3. 編年体記述の「六郡誌大要」（年表）のように、東海から出雲、山陰、山陽、南海道等々、西領の国主を集めて立君したことで丑寅日本国長老たちの不興を買い、荒覇吐族を退いて日本を国号とする連盟国を創設した

とする説等、幾つもの説があります。

いずれにしろ、三輪山を拝し、東海から赤間まで、広範囲にわたる国々のリーダーとして存在した近畿日本（ヤマト）の国は、親魏倭王である女王国とは「別性格の国」という条件を満たしていると考えるのですが、どうでしょうか。

追記／

〇奪還を成し遂げた後の騎軍にふれませんでした。騎軍は草原が少ない近畿ヤマトは居心地が悪く、多くは東国へ引き上げて行った、と記しています。

〇「記紀」では、孝元天皇・開化天皇、崇神天皇もそれぞれに死去年齢が百歳を超えますが和田家文書には、孝元天皇を立君させた政権（三輪山を祀り、旧体制を復活させた）は、30 年で終わったとする記事があります。（下記参照）孝元の後を継いだ稚根子彦（開化）が、本国の日本国（東国：日高見国）を蝦夷と蔑み、国名の日本を廃して再び「倭」を称したと記しています。更にまた、東国を制して、近畿ヤマト一統の国をつくる野望を持ち、しばしば兵を動かした、とも記しています。

〇荒覇吐神一統史

出雲神社に祀らる玄武の神、亀甲とイヒカの神は荒覇吐国主三神にして、古来より祀らるも、世襲に於て川神とて遺りぬ。出雲荒神谷神社は大物主の神を祀りし処なるも、廃社となりにしは開化天皇の代なり。討物を神に献じるを禁ぜしより無用となりぬ。**倭領に荒覇吐神にて一統されしは、少かに三十年なりという。**

神器ことごとく土中に埋め、神も改めたる多し。孝元天皇をして荒覇吐神布せにしも、開天皇をして是を改めきは、奥州に根子彦王を建宮せるに依れるものなりと曰ふ。**開化天皇鉄の武具を好みて神器とし、鋼なる神器を土に埋めたり。神をば天地八百万神として荒覇吐神を廃したりと曰ふ。**

大邑土佐守

